

## 令和4年度「知事と県民の意見交換会（北秋田地域振興局）」議事要旨

- テーマ : 持続可能なふるさとへ！新たな人の流れを創出
- 日時 : 令和4年7月15日（金）14：00～16：00
- 場所 : 【視 察】上小阿仁村集住型宿泊交流拠点施設「コアニティ」  
【事例発表】上小阿仁村地域おこし協力隊 F氏  
【意見交換】上小阿仁村集住型宿泊交流拠点施設「コアニティ」1階ホール
- 参加者 : A氏（いしころ合同会社代表社員：ファシリテーター）  
B氏（大館市地域おこし協力隊）  
C氏（大館市地域おこし協力隊）  
D氏（北秋田市地域おこし協力隊）  
E氏（北秋田市地域おこし協力隊）  
F氏（上小阿仁村地域おこし協力隊）  
G氏（上小阿仁村地域おこし協力隊）

### 知事挨拶

（佐竹知事）

意見交換会に参加いただき感謝する。

毎年、全県をまわり、いろいろな面や様々なジャンルで話を聞いている。そして、様々な県の施策事業の予算を作るときにも、いろんな方、県民の方の意見や状況に関して伺ってから県の政策を作っている。

本日は、皆さんが今やっていること、あるいはどういうことを目指してやっているのかとか、またやっている際のいろいろな悩みやあるいはこれからどのように展開したいのかとかを聞きたい。それを整理していろいろな面で県の事業に活用したい。忌憚のない話を聞いて、いろいろな面で現状はどうだとか、あるいはこれからの課題、地域の問題や捉え方について参考にしたい。

今日は様々な地域の人、様々な体験をしている人がいるので、どのような話になるか期待している。

### 視 察

【上小阿仁村小林村長の案内により、集住型宿泊交流拠点施設「コアニティ」視察】

### 事例発表

【上小阿仁村地域おこし協力隊F氏より、市町村の垣根を越えて活動している地域おこし協力隊員の任意組織「COKs（コックス）」の取組について発表】

## 意見交換

### 【ファシリテーターA氏による自身の活動内容紹介の後意見交換を実施】

#### （A氏：ファシリテーター）

最初に、参加者の皆さんから、自己紹介と、地域おこし協力隊として秋田県を選んだ理由や活動への思い、当地域に感じている課題などについてお願いします。

#### （B氏）

東京の専門学校で2年間学び、パティシエとして、秋田市の洋菓子店で3年半、埼玉県熊谷市のフランス菓子店で5年仕事をしてきたが、コロナの影響でUターンを考えていたときに協力隊の募集があったので応募し、採用された。

移住関係の業務だが、協力隊の活動内容に悩んだ時期に他市町村の協力隊員と話をし、協力隊の横のつながりを作って地域活性化につながったらいいのではないかとということでCOKs（コックス）の活動を開始した。

地域活性化の本質を突き詰めるとやはりお金を回すことだと考えている。地域経済を本質的に良くするとはどういうことなのかということ、みんなに考えて貰いたいというのがCOKs（コックス）の活動の一つでもある。

今は家族と生活をしているが、地方の方が都市部よりも生活費が安いということはない。今後起業する予定で、ここで生活できるよう頑張るつもりだが、移住とか観光とかいう前に、現に地域で住んでいる人たちの生活が豊かかどうかというところを考えた方が良い。

#### （A氏）

私が話した「自立した地域活性化と暮らし続けていくための生業」というポイントとも重なってくる。

#### （D氏）

令和2年の7月に着任した。その前はスペインで1年ほど暮らしていたがコロナで帰国せざるを得なくなった。

いつか田舎暮らしをしてみたいという将来的な目標はあったが、コロナ禍において、自分のやりたいことを先延ばしする必要はないと感じたことから、田舎に移住しようと決めた。

秋田県を選んだのは、前職が飲食業界であったことから、美味しいものがある場所で、温泉がある場所で、自然に囲まれた場所で、と考えたときに、きりたんぼ、いぶりがっこ、日本酒というところが頭にパッと浮かび秋田県一択だった。

着任当初は「生活で不便なことは何か」とよく聞かれたが、不便なことはひとつもない。ただし、30年、40年と生活をしていけば免許返納後の交通手段とかには困ると思う。

ただ、不便なことはないが、嫌なことが1つある。それはゴミ袋に名前を書いて出さなくてはならないことで、これはすごく衝撃的だった。これを何とかして欲しいと2年

間言い続けているが何も変わらない。この地域では女性とはそのぐらいのものなんだろうなと思っている。

地域が今必要とする年齢層は20代半ば前後の女性だと思うが、若い女性の層が結局いない、来ない、戻ってこないというのは、そういったところへの配慮のなさの結果なのではないかと感じている。

自分は、食を通して地域に新しい人の流れを作りたいと思っている、日々活動をしている。そういう中で、COKs（コックス）の立ち上げにも携わった。協力隊退任後も、この秋田県の食というのを外部に向けて発信していきたいと思っている、今現在その地盤づくりを行っている。

#### （佐竹知事）

秋田市で、ゴミ袋に名前を書くなんてやったら苦情で大変だ。

#### （D氏）

その通りだと思うが、地域の中ではそれがルールだから当たり前ということになっている。これから県外の女性だったり、女性に限らず男性でも、あまり知らない土地で自分の名前を書いてゴミを出すことが非常に気持ち悪い、という感覚を持って欲しくてこの話をした。

#### （F氏）

協力隊のミッションは、関係人口コーディネーターであり、地域の情報発信とか、イベント企画の運営などをやっている。

令和3年の3月に着任して1年半が経過した。秋田を選んだ動機はやはりコロナの影響だった。個人でパソコン関係の事業をしていたが、コロナで営業活動もできず、もう東京周辺にいても仕方がないと決意して、元々地域おこしに取り組んでいたこともあったため協力隊として応募し、着任した。

活動のひとつとして地域でのスマホ教室をやっている。高齢化が進む秋田県で、スマホを使える高齢者が増えていったら面白いという思いがある。ゆくゆくは高齢者がSNSでどんどん発信できるようにしていきたい。

この地域の課題のひとつは高校がないこと。地域に中学校までしかないの、子どもたちは高校から外に行ってしまう。もうそこから外に行く思考になってしまっている。

高校から外に出て、大学でまた外に出て首都圏に行ったりすると、秋田に戻ってくるかという、やっぱり郷土愛がないとなかなか難しいなというところがあるのではないか。高校を作るのは難しいので、中学までの間にどれだけ郷土愛を育めることができるのかということが必要と思っている。子供たちの思い出づくりを何かやっていきたい。

#### （A氏）

ふるさとキャリア教育のおかげで地元への郷土愛を持ち、将来は帰ってきたいという高校生たちがアンケート結果を見ても増えてきているが、最後は働くところが課題となっている。

### (G氏)

令和3年12月から協力隊として活動している。出身は北海道で、着任前は札幌市の児童会館で13年間指導員をしていた。秋田県を選んだ動機は、児童会館で勤めているときの知り合いに秋田県出身者がいたが、一足先に帰郷したその人が協力隊募集を教えてくれたのがきっかけである。

募集内容が移動販売関係だったが、単なる買い物弱者支援ということだけでなく、販売車の車体に「御用聞き」と書いてあるパッケージに感動して応募した。「御用聞き」になりたい、という思いで頑張っている。

今は、言葉の壁に当たっている。御用を聞きたいのだが、その御用が一体なんて言っているのかがまだ理解できない。やはり高齢者が多いので、なおさらその言葉が難しい。そこをちょっと頑張りながら引き続き活動したい。

地域の課題とは違うかもしれないが、巡回先で出会う人たち、ほとんどが60代から90代だが、とにかく元気で90代でも歩いて車まで買い物に来ている。この地域でそうやって長年生活してきている方のために、何かもうちょっと楽しいなとか、充実している時間があったらなとか、便利になったなとか、そういう瞬間を増やしていけることは何かないかなってという思いを持っている。

### (E氏)

秋田市の出身だが、若い頃には都会への憧れがあったため高校卒業のタイミングで横浜に移り住んだ。その後、趣味でダイビングをするようになってから、沖縄県に行くようになり、沖縄県に整体院を開業して10年ほど住んでいた。そこでのお客さんとの会話で、秋田県の話とか、秋田の魅力を知りたいようになり、また秋田に戻りたいなと思うようになったことから地域おこし協力隊に応募し今に至っている。

今の活動は、森吉山や周辺の地域をPRして、関係人口の創出を拡大していく取組をしている。あと1週間もすれば高山植物がすごく良くなる。景色が変わるぐらい入れ替わりが激しいので、そのような森吉山をたくさんの人に見てもらいたいと思っている。

### (C氏)

ANAから来ている。協力隊として着任する前は5年間客室乗務員として働いていた。

福岡県出身で、本当に縁もゆかりもない土地だが、コロナ禍になり、CAという仕事もだんだんと減ってきたときに、大学のときに学んだ地方創生に携われる仕事、地方での観光に携われる仕事があるということとでやってきた。

来て、本当に四季の自然が豊かで、食も豊かで、人も、秋田弁で確かに難しいこともあるが、すごく優しく接してくれて良い所だなと思ってとても満足している。

ただ、会う人、会う人に、なんでこんな田舎に来て、何もないでしょうと言われるのが本当にもどかしいと思っている。地元の人に「ここはこんなに素敵な所なんだ」というのを気づいて欲しくて、地元の人向けにSNSで情報発信を始めている。

1年目は、地域での観光客へのおもてなしに少し足りないところを感じたので、地域ならではのおもてなしにANAでのおもてなしを掛け合わせて、観光に必要な大館なら

ではのおもてなしができれば良いと思い、セミナーを開催したり、講義を行ってきた。

2年目の今年は、来年のハチ公生誕100年のプロジェクトに携わっているが、このプロジェクトが終わったときに地元の事業者が稼げるきっかけになること、もうひとつはこのプロジェクトをきっかけにみんながまとまって横の連携を取りながらひとつの観光に目指していけるようになれば良いと思って取り組んでいる。

#### (A氏)

参加者の皆さんの自己紹介が終了した。いろんな話も出たが、佐竹知事からこの方から何か聞いてみたいというところがあったらお願いしたい。

#### (佐竹知事)

同じ秋田県でも県南と県北では全然違う。県南は農業が大半だが、農家の方の声は結構強い。県北はまだヒエラルキーがある。なんとなく、堅苦しい。偉い人が真ん中にいて段々と上から順序にくる。県北はズケズケ言う人がいない。みんな遠慮している。

あと、県南は小さなお祭りでもPRを結構している。しかし県北ではお祭りに招待を受けたことがあまりない。花輪のお祭りも見なかったし、鷹巣だと綴子のお祭りも見なかった。大館のお祭りなど秋田市の人は全く知らない。その辺のスタンスはだいぶ県南と違って、県北は息苦しい。

秋田県に移住してきた人は、秋田市が一番に住みたいところだと言う。なぜなら秋田市は匿名性が高いからだそう。こっちは人は、人は良いが、悪気なくしてしまうことで問題になることがある。意識の違いは修復していかないといけない。

地域社会で他の情報が入らないからそうなる。特に県北は企業文化として、木材産業や金属産業といった大企業の文化なので言わない文化になった、県南は農家が多いので言うという文化の違いが大きい。

#### (A氏)

例えばさっきのゴミ出しの問題もそうだが、小さな集落などでは、外から入ってくる若い方にはちょっとプライバシーの面で心配なところがある。でも住んでいる人たちは多分良かれと思ってやっている部分もある。そういった感覚の違いというところを、埋めていかなければならないと思う。

この後、少し意見交換をしたい。もう少しこの地域の課題のこととか、あとは地域協力隊、それが終わった後にどうしていこうかという思いのところも、皆さんに聞いてみたい。

#### (D氏)

ここに着任したときに、この地域には仕事がない、稼げないという声をよく聞き、今でももちろん聞くが、そもそもお金が稼げないのではなく、稼ごうとしていないということが2年経った中で見えてきた。

先ほど入場料を取るということが出たが、それが高いとか安いとか言う前に、何かを継続・持続していく上で、やっぱり最低限の料金を設定するというのは、今、秋田県に

とってその認識を植え付けることがものすごく大事なことだと思っている。

仕事がないと言うのは若い世代ではなく、主に50～60代で、今現在、大学生の子どもとか、就職活動している子どもがいる世代。その人たちが子どもたちに、秋田に戻ってきても仕事がないから、そのまま東京や都心部の方で就職をしろと言っている。それを聞いて育った若い世代は、本当は戻ってきたいな、来ようかなって思っている、それが打ち消されてしまっている。

その反面、例えば移住者、県外から来た人に対しては、お決まりのように定住してくれるよねとか、定住するのかなとか、そういう言葉を悪気なく投げかけてくる。移住と定住を結婚とお付き合いっていう形で例えると、移住という言葉がお付き合い、定住という言葉が結婚とすると、まずお付き合い当初、移住したての頃はお互いのことはわからない状態で、周りから結婚するのって聞かれても、したいとは思っているができるかどうかはわからない。やはりその地域のことを、お互いのことを知っていくにはある程度の時間が必要だと思う。

やはりいいところも悪いところも、全て知った上で、なんかこの人という居心地いいな、この地域で暮らしているのは居心地いいなっていうのを自然に思えたら、その延長線上に定住、結婚っていう言葉がついてくるのではないかと思う。

それで仮に離婚したとしても、そこからまた新たな人生が始まるということもある。定住したのに出て行ってしまったとか、せっかくいろいろやってあげたのにとかということではなくて、やはり地域と人の相性っていうのはあると思うので、それを地域全体で、もう少し懐深くというか、広い目で見守っていくスタンスが、秋田県全体で持てたら良いと思っている。

#### (A氏)

移住と定住のところは、もちろん協力隊として将来的に定住してもらえれば、ということはあるが、外からの風というのはやはり重要だと思っている。一度東京に出て戻ってきたというの、地域を俯瞰して見られる要因だったりする。

また、集落の人が自分の行動を知っているのは若いときには嫌だったが、東京で暮らしてみると、人間の本来のあり方からすると、東京なのか、地域なのか、どちらがいいのかは、世代や人によっても多様であると思っているが、それが議題に上がってくるのはすごく面白い。

#### (B氏)

協力隊の任期があと1年弱というところで、今は起業をする予定で話を進めているが、家族でどうにかして生活をしていかなければいけない。

地元密着のお店というイメージでは、人口は年々減っていくし、お菓子屋さんも多いし、コンビニも多い。更にオンライン販売の時代でもあるので、見えない競合店みたいなのもあってかなり大変で、待ちの姿勢でお客さんが来るのを待っているようでは、多分限界が来る。10年先でビジネスを考えたときに、対面販売でどこまで集客できるのかということを見ると、やはり地元だけでお金を回すというのは絶対的に無理があると思っている。

東京の輸出エキスポというイベントで、出店していた大瀧村さんの活動はすごいなとびっくりした。米を作って自社で米粉の工場を作って、そこから更に1歩踏み込んで、海外に向けて、肉を食べない人たちの餃子だったり、麺類だったり、そういうものを作って販路を開拓して売っている。貪欲に資金を稼ごうとして海外も目指しているというのを見て、すごい衝撃的だった。

それが自分の商売にすごく重なるところがあって、そういったやり方にシフトアップさせていかなければいけないと思った。田舎が悪いとかではなくて、どう考えてもこれから人口が増えるということはまずないので、外部需要というのを見い出して、地域経済をいかに回していくかということを考えなければいけない。

#### (A氏)

起業やスタートアップのときには行政の補助金等もあったりするが、協力隊員でこれから起業する方にも起業資金だけは渡る。ただ、それだけで全部足りるわけではないので、今後、協力隊の任期中に準備を進めながら、その後に起業、創業していきたいという人への支援を何か考えられないかと思った。

今後の展望の話もいくつか入っていたが、こういう方法でそれが解決できるのではないかみたいな話も是非して欲しい。やはり、これからチャレンジしようとしている方々を応援しても、生活できない限りはここでの定住もない。今後の展望や具体的な手法、もしくはその前の課題のところでもいいので話して欲しい。

#### (F氏)

人の流れを創出するアイデアについて話したい。関係人口コーディネーターとして、まず最初にやったのが、自分からいろんな地域に行って自らよその地域の関係人口になるということだった。

活動している地域にはよその市町村に比べたらやはり観光資源というか、そういったところが少ないという思いがあり、それであれば一つ一つのところに留まらず、よその市町村と連携してイベントとかを企画したりすると連携できるのかなということで動いている。

今度、婚活のイベントを行うが、自分の市町村だけでなく他の市町村を含めて企画するなど、もっと関係人口をどんどん増やしていくような試みをしていく。

#### (G氏)

新たな人の流れということ意識してというよりは、とにかく今ここにいる人たちとどうやって信頼関係を築くか、どうやって御用聞きになって、地域の人たちの日常をプラスアルファで彩れるかということを考えてきた。

この地域は高齢者の1人暮らしが多いので、家の中で倒れたり転んだりとかしたときに使用する緊急ボタンみたいなものが家にあるとしたら、そしてその連絡先も家族だけではなく、例えば集落内の仲が良い人につながるようにできるとか、役場なのか家族なのか、それは本人なりその家族が選ぶみたいなシステムがあれば、少しプラスした安心感を持って地域でずっと暮らせるのではないかな。

### (E氏)

観光の関係人口の方だが、森吉山は高山植物、紅葉、全国でも数少ない樹氷と、春、夏、秋、冬のどれもが素晴らしい山だと思っている。

そこに実際に足を運んで見て欲しいとの思いがあるが、行きたいんだけど、どんな装備をすればいいのかわからない人も結構いたりするので、こんな装備で、こんな格好をして、こんなルートで行けば良いということをイベント的に案内してたくさんの人に来てもらえればと考えている。釣りをしてみたい人も同様で、イベント的な感じで皆さんに知ってもらえれば良い。

また、秋田県は郷土料理が有名なので、宿泊をして、秋田の味も楽しんでもらえる感じになればいい。

### (C氏)

流行している二拠点居住に対して秋田県の支援などがあつたら良いのではないかと。今ANAから秋田県にきている13名のうち、10名はANAで働くときだけ東京に住んで、残りは秋田県に住んで生活をしている。そして、その10名のうち、2名は子どももいる。子どもを秋田県に連れてきて、生活をして育てている。

その人たちがどうして秋田県に移住したかというところ、やはり都会ではなく田舎の自然の中で、伸び伸びと美味しいものを食べさせて、美味しい空気を吸って子育てをしたいということである。

今、コロナで、ANAでも働き方が多様になった。東京で働いている友達を見ても、やはりテレワークが増えたり、ワーケーションが増えたり、そういったことを推進していく会社も本当に増えている。

そういったときに、田舎が新たな人の流れを創出するためにどうするかということを見ると、秋田県には空港が2つあり、しかも学力が全国的に見てもトップクラスということで、秋田県で子育てをしたいって思う人を増やすのはどうだろうか。

今、田舎で暮らしながら都会の仕事ができるという状況が増えている中で、秋田県に二拠点居住のシステム制度が充実していたら、よりたくさんの方が東京で働きながらも秋田県で生活をする事ができるのではないかと。

### (A氏)

皆さんの話を聞いていると、社会に一度出て、専門性のある方が協力隊になっているので、もっといろいろなことに取り組めるのではないかと。それは多分に行政でも一緒に、ずっと公務員をやっている人と、一度外に出て社会で働いてきた人とは見る位置もちょっと違ったりする。そのような視点で、これから起業していきたい、もしくはここで定住していくために働きたいという人たちを応援する仕組みづくりとかをすれば良いものができたりするのではないかと。

60代の人たちがまだまだ元気でたくさんいるので、その人たちからいろいろ教えてもらいながら、でもその先輩たちにチャレンジして突破できるように頑張りたいと思う。

#### (D氏)

なぜ秋田県を選んだのかということでは、自然があって、時間の流れもゆっくりで、人もすごく温かくて、優しくて、美味しいものもたくさんある、ということになるが、今言ったキーワードは正直秋田県以外でも当てはまるキーワードだと思うので、なぜ秋田県なのかというところを、これからもっと深めなければならないと思っている。

そのためには、日本一子育てがしやすいとか、日本一企業をサポートしてくれるとか、そういったオンリーワンではなくてナンバーワンをやっぱり県全体で目指せる、目指していく、そういう気持ちとか目標を掲げることがすごく大事なことだと思う。

地域の人と話す中で、どうしても行政が行政がという言葉をよく耳にするが、実際にその人たちが動いているのか、意見を届けているのかということとそうでもないと思っている。1回やったから終わりではなくて、やっぱり伝える、伝わるまで伝え続けなければいけないと思っている。なので、私もこのゴミ問題を2年間ずっと言い続けているが今回も出させていただいた。

一例ではあるが、行政もその地域もやっぱり共に何か目標を持って一緒に同じ方向を向いて目指していくってことが、秋田県の人口減少、少子高齢化が加速しているからこそ、日本一子育てがしやすいとか女性が活躍しやすい社会ではなくて、男性が1年間育休を取れる県であるとか、そういった観点というのも少し変えていくのもいいのではないかと、必要なのではないかとと思っている。

#### (A氏)

秋田県でもいろいろなナンバーワンがある。ナンバーワンになるためには、もうここが一番課題だよ、全国ワーストワンだよというのを、なかなか悪いことは表に出しづらいが、それをクリアするために1回出してしまった方がいいと思う。

女性の活躍ナンバーワンという目標も、女性が活躍できていないからこそナンバーワンにしましょうとか、限界集落で人口減少率が1番高いから、そこにチャレンジする人を募集しますとかというように。

全国いたるところで、そういう地域ベンチャーとか社会起業家が地域課題をチャンスと思って活動している。大学に進学したりとか、首都圏で働いている人たちでも地域課題をチャンスと思っている人たちはかなり多い。

地域課題を企業の方で解決しようとしているので、悪いところははっきり悪いと、ナンバーワン、ワーストワンと言いながら、それをクリアするためのナンバーワンを目指したいと思うし、ここにいる人は何かそういう気概がありそうな気がしている。

こういう感じできちんと話はまとまっていないが、今日聞いていただいた中で、知事から最後のコメントをいただきたいと思う。

#### (佐竹知事)

いろいろとお話を聞いて参考になる点もあるし、勉強になる点もあるし、なるほどそうかということもあった。

秋田県は、全県レベルでみると、ここ2、3年の人口当たりの起業率は非常に高い。特に女性は。その成功例を見ると、地元でやるけれども東京をターゲットにしているも

のがある。自分の住んでいる地元でないところでやっているのがうまくいっている。

あとは勤め先がないという問題だが、これが昔からの秋田県の産業、鉱山とか林業、県南の農業に頼った結果である。今は事務員はあまり必要ないが、ホワイトカラー志向が高いのが秋田県の特長だ。今はホワイトカラーよりブルーカラーの方が給料が高い。大館市の誘致企業ではボーナスも高く住宅手当が10万なんてところもある。しかし、親がブルーカラーにはさせない。ネクタイを締めてやる仕事をさせたがる。そういう秋田県的な特長があって、なかなか意識が変わらない。子どもが良くても親が変わらなくて、そこはだめだというのが結構多い。

あと、地域おこし協力隊では、ネットワークという話が県南でも出ていた。協力隊は県南、中央、県北とたくさんいるので、この全体のネットワークを作るということ、協力隊員が集まって直接お互いに情報交換するというのを来年やる。同じ県内でもどうしているかわからないという意見は相当にあるので、県もお手伝いする。

移住、定住や二点居住についても既にいくつか支援制度はあるし、子育ての面では1人当たりの予算額は秋田県は日本でもトップの方である。これ以上やると県財政が破綻してしまうくらいやっている。

移住者が一番多いのは秋田市で、田舎でも何でもない中級都市にやはり人が集まる。問題は農業。農業は耕地が決まっているので、機械とかで生産性を高めれば人はいらなくなる。

あとはお祭り。楽しい祭り、人が集まる祭り、持続性のある祭りには行政からお金が出ていない。秋田市の竿燈も出ていない。角館のお祭りも出ていない。行政がお金を出さなければお祭りができないようなら、これはなくなってもしょうがない。文化財のものとは別だが。

町内会とか年寄りが非常に多い。年寄りの意見が強かったりするところは若い人に頑張って変えて欲しい。やはり若い人の方に照準を合わせて、年寄りにはあーだこうだ言わないでまかせてしまう。そういう地域をつくるには、地域で年配のボスをつくらないこと、これが1番だ。

### (島山局長)

以上をもって、本日の意見交換会を終了する。何かあったら、総合政策課または振興局まで連絡をお願いしたい。

また、本日皆さんへの配布資料で、「公募委員募集」の案内をしている。県ではこの意見の他にも、県民の皆さんからの意見を県政に反映させるため、各種審議会の公募委員を募集している。積極的に応募いただければと思う。

また、今回の話題になった人の流れの創出に向けては、大館能代空港羽田線の3往復運航の継続も大変重要となる。県あるいは市村の運賃助成も活用できるので、積極的な活用とともに知り合いの方への宣伝をよろしくをお願いしたい。

以上